

## あとがき

本報告書は、平成 16 年度、17 年度、18 年度に実施した「転換期の高等教育における学生の教育評価の開発に関する国際比較研究」の研究成果をとりまとめたものである。日本の高等教育が転換期にあるといわれて久しい。転換期に直面している日本の高等教育の課題の一つとして、学生の成長につながる教育評価とそれらを支える間接部門の存在をどう位置づけていくかということが挙げられる。学生への教育評価には本報告書でも触れているようにアウトカム評価などの到達度評価を含めて、様々な種類があるが、本研究では従来の日本の高等教育がそれほど開発してこなかった学生の情動的側面に評価を当てる教育評価に焦点を当てることにした。すなわち、本研究の目的として、転換期の大学における学生の教育評価を、学習成果の達成にのみ焦点化するのではなく、現在の学生の家庭環境、経てきた学習背景、若者文化等が及ぼす影響を解明し、その上で大学での学習における学習意欲、動機づけ、学習態度や習慣などの情緒的な要因を向上させることにつながる教育評価の開発をおこなうことにしたのである。その場合、アメリカで多くの研究蓄積のあるカレッジ・インパクト研究をベースにして開発されてきた大学生調査の日本版を開発し、それを日本の大学生に使用することで、将来的には国際比較研究へとつながる基盤を構築することにした。

さて、こうした教育評価を大学の中で活用し、学生の教育改善および大学の教育改革を支援する部門が国際的に見ると進展してきている。一般的に I R と呼ばれるこの部門は、各大学内の教育研究活動に関する調査研究活動を行う管理部門であり、かつ経営そのものに関わるさまざまな情報の入手とその分析を行い、組織管理の改革支援を行っている部門である。ほとんどのアメリカの 4 年制大学や短期大学に設置されている。IR は経営や教育にかかわるさまざまな情報の入手とその分析を行い、組織管理の改革支援を行っている部門である。とりわけ学生の多様化が顕著化するようになった 1980 年代以降、学生のデータを集積し、教育に活かそうという趣旨のもとで、IR 部門が多くのアメリカの大学に常設されるようになってきたという。現在は、アメリカには大きな学会が存在しているし、ヨーロッパにも I R に関する学会、アジアにも I R に関する学会がつくられるようになってきている。本研究でも、こうした I R 部門と学生調査の関係等をアメリカ、オーストラリアの大学への訪問調査を通じてその役割、意義等に関する多くの知見を得た。

本研究を通じての問題意識は、メンバーそれぞれが研究会での発表や学生調査のデータを共有しながら共同研究を重ね、学会で発表することを通じてより鮮明になったと思う。アメリカやオーストラリア、カナダの大学への訪問調査を通じて、学生の成長を支えるための教育基盤のひとつとして、FD が欠かせないことも痛感した。かつ I R 部門がいかに適切なデータを大学に提供しているかを目のあたりにして、教育改革はカリキュラムや教師の質や FD のみならず、それを支える組織の重要性も理解することができた。そうした成果は、メンバーが執筆した各章に明確にあらわれていると思う。研究代表者として、本研究に 3 年間携わってきたが、メンバーの高い問題意識や優れた見識にはいつも触発された。一緒に、海外調査をすることとそこでの議論も大変実りのあるものだったと感謝している。

研究を通じて、多くの海外の大学の関係者や研究に示唆を与えてくれた人たちとの出会いも有意義であった。そうした海外の研究者たち、インディアナ大学ブルーミントン校・中等後教育研

究センターのジリアン・キンジー博士，メルボルン大学・高等教育研究センターのケリー・ハリス博士，初年次教育政策研究センター所長ランディ・スィング博士，カリフォルニア大学ロサンゼルス校，高等教育研究所のジョン・ブライヤー副所長，ハーバード大学初年次教育学部長のトーマス・ディングマン氏を研究会や国際シンポジウムに招聘できたことは大変有意義であった。最後に，本研究に精力的に関わってくれたメンバーの皆さん，キンジー博士の翻訳を忙しいスケジュールのなかで完了してくれた早稲田大学・大学院生の江原昭博氏，そして忙しい年度末に編集作業を引き受け，円滑に大変質の高い作業を進めてくれた大学評価・学位授与機構の森利枝氏には心から感謝の意を表したい。

2007年3月31日

同志社大学 山田礼子（研究代表者）

「転換期の高等教育における学生の教育評価の開発に関する  
国際比較研究」研究成果報告書

研究代表者：山田 礼子(同志社大学)

課題番号： 16330168

発行日： 2007年3月31日

印刷： 木村桂文社